

花の体操部

そのかみ還し数千年  
 尽きせぬ流れ米代の



.....

愛する校歌を声限りに歌いながら秋田の町をゆく若き中学生たち。先頭に中田直万（2期）相沢浩二郎（3期）相沢常四郎（同）高原常保（同）田中直吉（4期）らの誇り高き顔。夕日に照らされて、ひときわりしく、まさにがい旋將軍。

「あれは、能中の学生さんたちでねか」

「大きな優勝カップは、何でもらったもんだべかな」  
 と、その一団は、土崎駅を通り越した。いままでなら、ここ

で能代行き汽車に乗るところ。

感激のあまり、乗車駅を間違えてしまったのだろうか。実は、

土崎での汽車の待ち時間が長いので、いつそのこと次の追分駅まで歩こうとハッスルしたのである。昭和六年秋、能中体操部が全県大会で初優勝を飾った時の一コマ――。

× × ×

「おお、なかなか上手だ。その調子、その調子」

「よし、だら、もう一度……」

湊城尋常高等小（いまの中央公民館の位置）に、鉄棒の設備が二つ。この鉄棒が、町の青少年の健全育成に、能中体操部の初優勝にそれぞれ大きな役割を果たした。

昭和初年。大町、上町、畠町一帯の商店で働く、あんちゃんたちの間に、鉄棒ブームが起こった。当時の若者の楽しみといえ



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

ば、春の町内対抗綱引、夏の日吉神社のみこしかつぎ、丁山ひっぱり。それと、盆踊り、七夕に尽きた。力を持て余す若者たちが、身近なところに目をつけ、ひよいと飛びついたのが小学校の鉄棒。

仕事が終わると、次々に集まつて来て、自己流のウルトラCを見せ合つた。金はかからず、健康そのもの。

「オレたちにもやらせてくれねすか」

「よろしく願うすて……」

中田たち能中の生徒もまけずに加わつた。

この鉄棒でハツという妙技をやつたのが東京体操学校に行つていた学生。彼は休みで帰省すると必ずここに姿を見せ、オーソドックスで、しかも競技としての鉄棒を演じた。

「まったく上手だすな。同じ

人間の技とは見えねな」

能代の若者たちは、彼によつて開眼したといつていい。

「ことしこそ、わが能中体操部の念願を果たすべし」

前年（昭和五年）の大会は、優勝確実とされていたながら、秋田工業にカップをさらわれた。中田キャプテンがことしにかかる意気込みは相当なもの。

相沢浩二郎は、本来が柔道部員。道場の窓からやつと飛び出し鉄棒にぶらさがつてみると、柔道部キャプテンの山崎五郎（参議院議員）がおこつたものだ。「コラッ、相沢。まだ勝手なことをやらかしてゐな」

相沢常四郎はサッカー部員。いざ大会という時は、体操部員も兼ねた。

ついに念願果たす……。

昭和六年十月。秋田・將軍野で行われた全県大会で、能中は

開校以来初の団体優勝。

「やつた、やつた。こんたにおもしろことだねな」

この栄光の陰に、体操能代生みの親であり育ての親、太田口政治先生の力があつたことはいうまでもない。

その年活躍した五人のうち、



四人はすでに故人となり、快挙を語れるのは相沢浩二郎（中田初雄県議事務所）一人だけ。せっかく全国大会の出場権を得ながら、遠征費がないため断念した。このことが惜しまれてならない。  
(敬称略)